

印旛大橋と 現在の風景

懐かしい



昭和30年代佐倉方面から印旛村に向けて完成間近な当時の印旛大橋付近の道路等の風景です。また、印旛沼の堤防が完成されていない状態ですが、その当時の工事の様子が伺えます。印旛沼開発は、昭和36年(1961)に印旛沼開発事業として着工され、昭和44年(1969)に完成しました。印旛沼の水面面積は約半分になり、残りの半分が干拓され立派な水田となりました。

現在は印旛大橋は見られません。道路の下に埋められた状態になっています。印旛沼は今では写真家や釣り師のメッカになっています。また、北沼と西沼を結ぶ捷水路の掘削の折り、市井橋の下あたりからナウマン象の化石が出土しました。そのことを記念して双子公園にナウマン象の親子の像が建てられています。

自然豊かで水のキレイな印旛沼を目指して

—環境問題で地域での取り組み—

●
金山英二

(佐倉印旛沼ネットワークカーの会)

1. 会の結成

自然に恵まれていた印旛沼は、昭和44年に竣工した印旛沼開発事業により現在の姿になり、治水の安全性は確保され飲料水・工業用水・農業用水としての利水の価値は非常に高くなり、千葉県にとってはなくてはならない湖沼です。昭和40年代から流域の人口増・生活の変化・工業化・農畜産業の拡大等により水質悪化・水生植物が絶滅の危機に陥る等、生態系を崩し、病んでいる印旛沼を佐倉市民カレッジに学んでいた私たちは、自然を豊かに回復し水がキレイな沼にして次世代に残したいと考え、沼に対してボランティア活動を平成11年1月から開始、同年5月に会を結成しその後広く市民に呼びかけ多数の参加を得て現在107名の会員で環境活動を続けています。

2. 自他の啓発活動

最初に始めたのは印旛沼や関連事項を知る自己啓発と清掃活動でした。

印旛沼と流域鹿島川・高崎川の観察を重ね、最近では水質調査も行いました。次いで学習会・講演会を行いました。印旛沼環境基金白鳥孝治先生・前県水質保全研究所小林節子先生・千葉工大滝和夫教授に教えて頂きました。印旛沼土地改良区・印旛沼漁業協同組合から印旛沼との係わりについての学習会・密本県議から県政より見た印旛沼の説明を聞きました。「利根川・印旛沼総合開発事業」の説明会を開き、国土交通省利根川下流工事事務所より解説をして頂き市民を含め120名の参加がありました。見学した施設は、印旛沼より工業用水を取水している県佐倉浄水場・川崎製鉄浄水場・飲料水浄水処理の柏井浄水場・佐倉市上座浄水場・水資源開発公園大和田機場・県花見川汚水終末処理場、佐倉市坂戸の農村集落排水施設。手賀沼・霞ヶ浦とその関連施設にはバスで見学に行き、幹事は

手賀沼には度々視察に行っています。両沼に比し印旛沼には親水会館がなく、水質浄化の浚渫・導水が行われておらず、浄化施設も一箇所しかなく落胆したが、反ってそれらを実現したいという欲求・気力を掻き立てました。

次は知り得たことを広く市民に訴えることです。印旛沼環境基金の助成を得て「印旛沼解説パネル」を作成し、佐倉ふるさと広場管理棟（愛称：佐蘭花）に掲示して、これをパンフレットにし広く市民に配布・学校の自然環境教育の資料としたいのです。また、家庭雑排水処理対策パンフレットを作成しました。これらは各所のイベント（印旛沼水質浄化推進運動・佐倉チューリップ祭・エコメッセちば等）に展示・配布し、印旛沼の現況等の情報発信に活用しています。

3. 清掃活動

ボランティア団体が手軽にできるのは清掃です。佐倉ふるさと広場を中心とした印旛沼や鹿島川・高崎川の道路・堤防の清掃から始めました。行政等が行う5月30日のゴミゼロの日・10月の印旛沼水質浄化推進運動、3月の佐倉朝日市民マラソンと4月のチューリップ祭前の清掃。また、河川愛護月間では県印旛土木事務所が行う印旛沼ふれ合い点検に参加し、さらに当会独自で春季・秋季に市民にも呼びかけクリーン活動を行っています。ごみ袋や集積ごみ処理は佐倉市が行ってくれますが、課題は沼や川の水際のごみや堤防に不法投棄されたバイク、冷蔵庫等の粗大ごみの撤去は、危険が伴い、費用の点でも私たちには出来ません。また、各団体が適宜に行っているのを年4回に定期化し、ごみ投棄防止策も合同で考え効果をあげたいのです。これらのことを県と印旛沼水質保全協議会（県・16市町村・印旛沼土地改良区・印旛沼漁業協同組合・水資源開発公園・川崎製鉄で構成、会長は千葉県知事）に訴え働きかけ最近になってやっと理解が得られかかっているため実現に向けてさらに努力を続けます。

佐倉チューリップ祭前に印旛沼周辺のクリーン活動を行っている



4. 印旛沼水質保全計画の推進

印旛沼の水質汚濁は手賀沼について全国ワースト2、飲料水供給の源水汚濁ではワースト1です。これは住民の生命に係わることで、水質浄化は必須の課題です。印旛沼の水を誰がどのようにしてキレイにしようとしているかを調査するとその最大の柱の一つは県「印旛沼湖沼水質保全計画」であり、他の柱は国土交通省の「利根川・印旛沼総合開発事業」であったのです。印旛沼は昭和60年に湖沼水質保全特別措置法の指定湖になり、県は5年毎に「印旛沼湖沼水質保全計画」を策定し、水質浄化を推進します。今年3月に第4期計画が策定されたので、未だかつて行われたことのない説明会を6月22日、佐倉市で県水質保全課により行いました。水質浄化の主な事業は、下水道・合併処理浄化槽の普及推進、都市排水路の整備、家庭雑排水対策の推進等の従来通りの事業で実施の実態は市民の皆さんが体感されている通りです。

水質保全計画が実施されて15年を経過した現在もCOD値は11ppmで水質基準値3ppmにはほど遠い状態です。その原因の一つは、水質保全計画に、手賀沼で効果があった導水その他浚渫・河川浄化施設・水生植物栽培等の実施や設置が策定・実施されていないからです。これらは前記の「印旛沼総合開発事業」によって実施される予定でしたが、利水需要の伸びがないので平成12年11月に着工が中止されました。この事業を水質保全計画に取り込むことが課題です。平成13年末には印旛沼水質保全協議会は、国、国会議員等に陳情を行い、県は14年7月31日によみがえれ印旛沼県民大会を開催しアピールしました。また、県は印旛沼の治水・水循環の総合的整備を検討するために、学識経験者、民間団体、行政で構成する「印旛沼流域水循環健全化会議」を13年10月に立ち上げ、浄化プラン作りを進めています。

もう一つの原因と思われるのは、印旛沼の水質汚濁の発生源別汚濁負荷量は、農地・森林・道路からの自然系が52%と生活系42%を上回っているこの削減

対策が極めて重要であるが、その対策は適正な施肥法の改善、流出しにくい肥料の推進、森林の適正管理、自然環境の保護等、道路対策では道路側溝や小水路の清掃等の促進が列挙されているが、これらの対策は関係者の利害得失が相反し踏み込んだ対策がとられず、誰がいつまでにどのように実施するか、という点がはっきりしないことにあると思われます。しかし、これらは、県や関係機関に対策実施を求めて行かなければならないと思います。

5. ネットワークの結成

印旛沼流域16市町村72万市民は、自然や利水の恩恵を受ける一方、水質汚濁の加害者として係わっています。住民一人ひとりがこのことを認識し水質浄化等のために実行・協力することはもちろんですが、16市町村の環境団体が連携し率先してことを進めれば効果は上がります。佐倉市在住の当会とNPO法人の「印旛沼広域環境研究会」「印旛野菜いかだの会」では「印旛沼連絡協議会」を13年10月に結成し、前記の印旛沼水質保全計画の説明会開催、印旛沼県民大会の実行委員を努めました。手賀沼には「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」が結成されていて水質浄化の実践、手賀沼フォーラムの開催等で成果を挙げておられるのに習い、流域16市町村の環境ボランティア団体のネットワーク作りを目指しています。

6. 結語

最近、印旛沼の自然回復や水質浄化の気運が高まり、スタートラインに就いたというのが実感です。それに情報の共有は未だしであり、行政とボランティア団体とのパートナー関係も未熟であると思われます。今後はこれらを解決し、官・産・民が一体となって総合的に実効のある施策を策定実行して実績を挙げることに協力・尽力したいと思います。私たちの活動は、自然豊かで泳げる印旛沼にするためには今後30年は続くものと思っています。

『根郷中学習林』の整備と活用

佐倉市立根郷中学校 土井 仁

◎『根郷中学習林』の樹木

①針葉樹：スギ、サワラ、ヒノキ

②落葉広葉樹：イヌシデ、イヌザクラ、イボタノキ、ヤマウコギ、ウツギ、ウルシ、ウワミズザクラ、エゴノキ、エノキ、カマツカ、ガマズミ、クマノミズキ、クリ、クヌギ、クワ、コナラ、コブシ、サワフタギ、タラノキ、ツルウメモドキ、ヌルデ、ネムノキ、ハリギリ、ハナイカダ、フジ、マユミ、ミツバアケビ、ムクノキ、ムラサキシキブ、ヤマサクラ、ヤマコウバシ、サンショウ、等

③常緑広葉樹：シラカシ、シロダモ、ネズミモチ、ヒイラギ、ヒサカキ、マンリョウ、ヤブコウジ等

◎学習林のキノコ（10月上旬）

ナラタケ、オオイチョウタケ、ヒロヒダタケ、ツエタケ、ドクツルタケ、ナカグロモリノカサ、ササクレフウセンタケ、シロイボカサタケ、スミソメヤマイグチ、シロハツ、カワリハツ、ドクベニタケ、ホコリタケ、シラタマタケ、ツチグリ 他（一部不確認、近い種名を記す）

◎年間計画（作業・活用）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作業	○	○				◎	◎	◎	◎	○		
授業	◎	◎				◎		○				
観察会	◎		○	◎			◎					

作業：落ち葉掻き、枝打ち、下草刈り、ゴミ除去

観察会：早春、春夏、秋の植物（芽吹き、花、実）

1. はじめに

佐倉には佐倉特有の自然がある。隆起台地上に散在する林や台地周辺に見られる斜面林や谷津は佐倉の貴重な自然である。根郷中学校の周辺にもそれらは見られるが、なかなか中学生の興味の対象にはならない。何かきっかけがなければ無関心のままで過ぎてしまう。21世紀に生きる人間にとって「自然や環境」についての理解は極めて重要なことである。地元佐倉の自然に興味や関心を持たせ、自然に親しんだり、知的好奇心、探求心を起こさせたい。生徒が自然の中で直接体験できるフィールドが学校の近くには是非欲しい。作業できる花壇や畑、観察や調査ができる池や川、林などである。身近に、そのような学習環境を整えることが必要である。

根郷中学校は歩いて10分ほどの所に、鹿島川が流れ、谷津田があり、湧水もある。放置され荒れた山林も多い。よくよく見ると、学校前にも荒れた林がある。整備し活用するには手頃の広さである。何とか活用したいと早速調査に取りかかった。大変荒れているが、樹種も多く良い学習林になりそうである。所有者は大篠塚にお住まいの方とわかった。早速お伺いし、お願いしたところ、子どもの勉強のためになるならと快く使用を許可していただいた。大変ありがたいことである。

本稿では、荒れた林を、学習林として整備していった取り組みと授業等での活用の試み、今後の活用について報告したい。



2. 『根郷中学習林』の整備

(1) 整備のねらい

荒れた林を学習林として整備する作業を通し、里山の保全や自然環境について考える。林が身近になるよう親しめる林にする。身近な自然を理解するなど学習に活用していく。

(2) 山林の概要

①所在地：根郷中学校南東側に隣接、佐倉南図書館駐車場、高速道路側道に囲まれた山林

②広さ：約4,000㎡

③整備前の状態：杉の木が主（大小100本程）、イヌシデなど落葉樹も多い。低木層はヒサカキ、シロダモなど、林床はアズマネザサが密集。周縁部はセイタカアワダチソウ、クズなどにおおわれ、スギやサワラなどの高木はフジが巻き付き樹冠まで覆っている。

(3) 学習林の整備

・学習林の整備・保全は基本的には、生徒に声をかけボランティア活動として行うことにした。活動期間は10月～3月で、月に3～4回天気の良い日の放課後実施とした。

(4) 学習林の整備経過

①山林所有者の許可を得る。（12年9月）

②山林調査（図面の作成：敷地と樹木マップ）生徒と巻き尺で電柱や主な樹木間を三角測量し図面に落とす（12年10月～12月）

③第一次林内整備（12年11月～13年5月）

・アズマネザサの除去（刈り払い機による）

・不法投棄粗大ゴミの撤去

・立ち枯れ木、倒木の撤去（チェーンソーによる）

④樹木調査（13年3月～4月：一部植物名プレート作成）



⑤看板作成（13年6月：不法投棄禁止の看板）

⑥第二次林内整備（13年10月～14年3月）

- ・アズマネザサの除去（保護者の協力）
- ・立ち枯れ木、倒木の撤去（教師、生徒）
- ・埋もれたプラスチックゴミ等の撤去（生徒）
- ・落ち葉掻き、枝打ち（生徒）

⑦第三次林内整備（14年4月～6月）

- ・枝打ち、林内ゴミ拾い
- ・混雑低木の一部除去
- ・フジなどツル植物の一部除去

⑧立ち枯れ木除去空間への落葉樹の植樹（実生で育てたクリ、コナラ、クヌギなど5本）

⑨林に隣接した空き地（市所有地：450㎡）の活用
・畑と野鳥誘致の樹木園とする。
・畑（150㎡）づくり。野鳥誘致木の植樹（カキ、サクランボ、ピラカンサなど7本：13年2月）

3. 授業等での活用(13年度の実践)

この林を、「根郷中・学習林」と命名し、ボランティアによる整備・保全活動に取り組んだ。理科や選択教科などの授業や総合的な学習の時間などでの活用を試みた。

(1) 理科の授業における活用

- ・1年：身近な植物の観察（林やその周辺、校庭の植物を観察、ちがいを調べる）
- ・3年：生物の生活とつながり「食物連鎖」「土の中の小動物、微生物とそのはたらき」「物質の循環」。(林床の小動物の調査などを通し、食物連鎖、物質の循環、森の働き更に環境の保全へと学習を進める。課題解決・探求的な学習ができる。)

(2) 選択教科での活用

- ・選択理科：学習林を学習活動の場として、生徒が課題追求の学習を行う。「樹木調査：樹木の四季」「植物調査：植物の四季」「学習林のキノコ」「学習林の昆虫」「野鳥の観察」など
- ・選択技術：「林業体験学習（枝打ち、落ち葉掻き、



植林)」「撤去木の活用：木工」「巣箱や林内ベンチの製作」「キノコの栽培」「腐葉土作り」

(3) 総合的な学習の時間：個人追求の時間の中で環境に係わる学習に取り組む。「里山を調べる」「里山の保全」

4. 今後の取り組み

(1) 学習林の整備・保全

里山保全ボランティア（生徒、保護者、教師）による活動を継続的に行う。

- ・アズマネザサの除去（11、12月）
- ・枝打ち、落ち葉掻き（12～2月）
- ・低木やフジの一部除去と不法投棄ゴミの回収

(2) 授業等学習活動に活用する

- ・理科や選択教科などで学習林の活用を引き続き行う。
- ・「林の自然」に関する研究テーマなど紹介し、生徒に関心を持たせ、科学の心を育てる。

(3) 「植物観察会」を定期的実施する。

○植物の専門家を講師に、「根郷中学学習林」やその周辺の植物の観察会を行う。

○対象は生徒や保護者など希望者を募る。

○時期：季節を選び、休日に行う。

- ・早春（樹木の芽吹きやシュンラン、キンラン、ギンラン、タチツボスミレなど）
- ・初夏（春夏の植物、樹木の花など）
- ・晩秋（秋の植物、樹木の実など）。

5. おわりに

学習林整備のきっかけは、根郷中学校の前にスギやサワラの林があることに気づいたことである。理科の教師に聞くと、土壌動物の働きなどを調べる土の採取（3年生）や林の周縁に生える植物の観察（1年生）に利用していることがわかった。林を外から見るとではなく、林の中で自然の移ろいや光を感じさせたい。整備を進めることにより林の持つ本来のすばらしさに気づかせたいとの思いがあった。身近にこのような林があるのは願ってもない幸運である。林を守る、里山を守るという活動を通し、自然に親しみ、自然や環境の理解・保全に関する学習を進めていきたい。地域の人の参加も募り、その輪を広げたいと考えて取り組んできた。林の中に生徒が作ったベンチを置き、林の涼しさや静けさを感じ、風の音や野鳥の声に耳を傾ける、そのような林にしたいと考えている。自然に親しむことにより、自然を大切にすること、自然を探求する心が芽生えることも願っている。

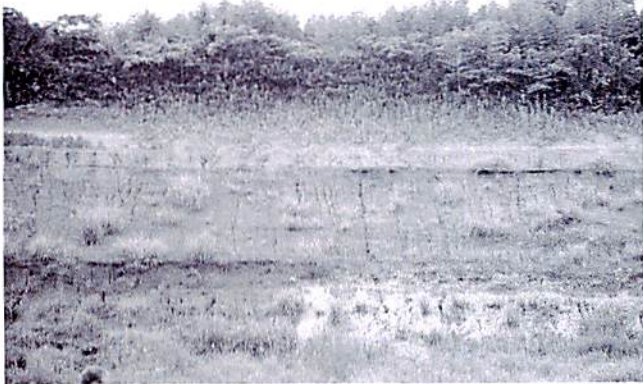
木下貝層

●
森 耕一

(印西市在住)

印旛沼周辺は、貝化石の宝庫

当地区では、地層の観察や化石の採集が、至る所の露頭で出来ます。全国の化石産地で、採集も出来る場所は少ないと思います。特に、平成14年3月19日に、印西市木下の、県立印旛高等学校入口脇の、県指定であった「木下貝層」が、国指定天然記念物となりました。又現在県指定の、酒々井町「上岩橋層」も共に重要な露頭で、沼付近の露頭の代表です。又印旛村六合小の近くの捷水路工事の時、昭和41年6月に、ナウマ



印旛村吉高字大竹の露頭。国際的に名高い成田層の上部貝層（中段の白色部）と下部貝層（崖の最下部の白色部）の2化石帯が観察できる

ン象の化石が産出しています。この復元標本は、風土記の丘資料館にも展示されております。この様な貴重な化石層に接して生活している私達は、本当に幸せ者だと思います。

私は現在印西市に居住しておりますので、特に「木下貝層」について、述べてみようと思います。木下貝層を含む成田層は、千葉県地質図で示されている様に、大きく房総半島の中北部を覆っています。木下貝層は、成田層の中で上部に位置し、その下に上岩橋層、清川層と続き、上総層群と古い地層になっていきます。貝化石を含む地層があるという事は、その地層が堆積し

た時代は海であったと考えられ、貝化石の種類により、その姿の自然環境、即ち暖海であったか、又寒海であったか、又浅海であったか、深海であったか、等推考出来るわけです。当時の海を古東京湾と名付けて、図の様に現在の鹿島灘の方向に湾口が、大きく開いていました。銚子半島から嶺岡の方に陸地であったと考えられます。この古東京湾に、今から約30万年ほど前から堆積を始めたのが、成田層です。清川層は、印西地区では、露頭として確認できませんが、成田市、下総町、佐倉市方面では一部が確認されています。印西で、上岩橋層が確認出来るのは、



古東京湾の時代（約15万年前）

地質年代表

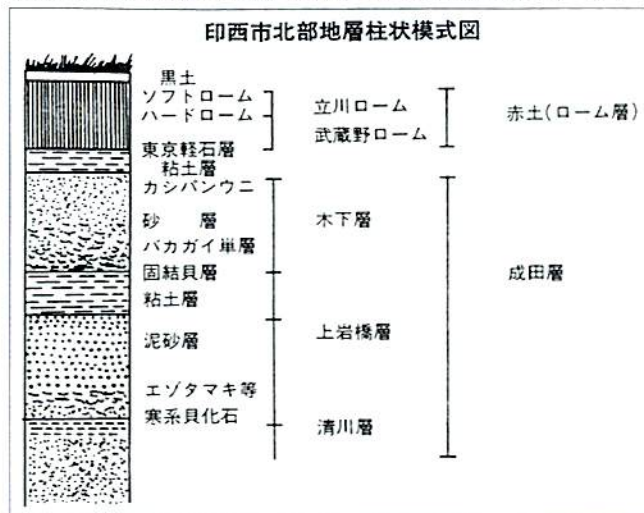
今から約何年前 (万年単位)	地質時代名		千葉県の主な地層		
1	新 第 四 紀	沖積世	沼のさんご層	木下層 上岩橋層	
50			洪積世		成田層 清川層 蔵堂層 地佐貫層 飯岡層
170		鮮新世 中新世 漸新世 始新世 晩新世	竹岡層		名洗層
500			天畑層		白浜層
2400	第三紀				
6400	中生代	白亜紀	銚子層群		
1億4000		ジュラ紀			
2億1000		三疊紀			
2億4000	古生代	石炭紀	銚子二疊紀層		
2億8000		石炭紀			
5億6000	先カンブリア代				
45億					

利根川の河底で、水位が特に低い時、中央公民館前の水門の河岸で観察採集が可能のときがあります。木下貝層は、国指定の露頭では、採集は出来ませんが、市

役所の近く、又大森小学校の近くの土取をした跡などでは採集もでき、貝化石の種類も多く、東京からも近いので昔から多くの研究者や、学生達が来ています。

当地区の貝化石層の特徴は、貝殻そのものが、化石として存在する事と、下部の粘土層直上に、固結して貝殻を含んだ、貝化石岩があることです。貝殻そのものは、トウキョウホタテとブラウンイシカゲガイなど、絶滅種を除けばすべて現在の東京湾あたりで見かける種類の貝殻と同じです。

名前を調べるにも、現生の貝類図鑑で充分間に合います。現在の海で拾って来た貝と交ざったら区分するのに大変です。貝殻は普通酸性の水には溶けてしまうのに残った理由は、印西市北部地層柱状模式図にある様に、貝化石層の上に粘土層があったからです。粘土層は水を通しません。又固結貝化石岩がどうして出来たかを考えて見ると、地層柱状図にある様に、最上層は黒土（植物の腐植土）で畑として利用されています。



その下がローム層（赤土ともいわれ、富士火山、箱根火山の火山灰が堆積したもので、酸度が強いので耕作には適しません）次が東京軽石層（これは海底火山の噴出が考えられます）。その下が粘土層（水を通しません）次が砂層（カシバンウニ、貝化石を多く含んでいます）その下が粘土層、砂層が上下で粘土層で遮られていることが、貝殻化石が多く又固結貝層が出来た理由です。酸性の強い水が、（上層のロームを水が通ると酸性になる）粘土層が浸蝕されて欠けたりして、砂層に入ると貝化石がとけて下へ浸みて行き下の粘土層の上部で、炭酸カルシウムが貝化石を取り込んで再び固結して貝化石岩になったのです。この古固結貝化石岩は、古墳時代後期、方墳の横穴式石室に多く使用され風土記の岩屋古墳を始め、印西市指定、大森の上宿古墳などに見られます。これはそれまで円墳や、前方後円墳などの石室に使用されていた筑波石は当時の香取の海を通過して、舟を使って運んでいたが、古墳時

代の後期になると、海が次第に浅くなつて一枚300kgもある大きな石を運ぶことが出来なくなって、地元の貝化石岩を使用したと考えられます。この化石岩は、印西地方では、石垣、石燈籠、石祠、などにも使用されています。又、チョコレート色の砂層、或いは、貝殻が溶けて形が残って酸化鉄になったチョコレート色の固結岩を古墳の石として使われている例もあります。当地区はこの様な特色をもった貝化石層での学習観察には、大変適していると思います。

参考書として、印西市、市史編さん室より刊行されている「木下貝層」には、貝化石の図集、観察地点の案内など記されているので、御活用下さい。又木下駅前の、利根川添いの中央公民館ロビーには、貝化石を展示してありますので、現地に向かわれる前にぜひお立寄り下さい。



山根不動尊の石灯籠



トウキョウホタテガイ (160×160)



ブラウンイシカゲガイ (70×70)

オニバスに魅せられて

鈴木朝夫 本埜村将監に在住



◎オニバス

池や沼にはえるスイレン科の1年生水草。初夏に発芽して、6、7月に葉を水面に浮かべ始める。

秋の初めに紫色の花をつける。成葉の直径は1 mに達し、浮葉の葉脈や、葉柄には鋭い多数の刺がはえている。

印旛沼周辺の印旛村、本埜村には、古くからオニバスが自生していた。昭和52年（1977年）に千葉県天然記念物の指定を受け、その後も葉を水面いっぱいに広げ、こぶし大の紫の花を咲かせてきましたが、昭和57年（1982年）に数枚の葉が観察されたのを最後に全く浮葉が見られなくなりました。その後多くの人達のオニバス復活の保護方法を検討して、種子の本格的な発芽方法を研究試行を重ねましたが、それ以後オニバスの発芽は見られず、千葉県の天然記念物の指定もはずされてしまいました。

著者が栄町立酒直小学校に勤務中にオニバスとは、どんな植物か知らない子供たちに見せて、理科の教材にしたいという気持ちから、印旛沼近くの堀から昭和42年（1967年）9月下旬に種子を採取して、同校にある水深約40cmの観察池にまき、水温等を自然状態に近い状況に保ち栽培して3年、昭和45年（1970年）8月に見事に開花させました。子供たちに見せてやりたいという気持ちを込めて、絶滅寸前のオニバスの人口栽培についての糸口を開いたと言えるでしょう、その貴重な写真をお借りして掲載いたしました。

その後、鈴木氏の努力も実を結ばず、オニバスの復活は出来ずに現在にいたっています。印旛沼周辺は広大です。最近水質もかなり改善されてきています。どこかで「オニバスが見られます。」と言う朗報を期待しています。



編集後記

印旛沼開発事業による交通路の確保は、印旛沼周辺の水田開発だけでなく、今まで渡し船に頼っていた印旛沼周辺の交通手段を著しく改善しました。今では印旛沼の渡しは残っていませんが、まだ、なつかしい渡しの後は残っています。渡しの後を散策することも楽しい一時となるでしょう。表紙は、その一つである渡しの後の写真です。今では双子公園としても残っています。

今回は、「佐倉印旛沼ネットワークの会」の印旛沼の水質改善を目的とする、地道な環境問題の取り組み。

佐倉市の中学校で取り組んだ、学校周辺の森林を学校林として生かした環境教育。

印西市の国指定の天然記念物となった。木下貝層の研究紹介。その時採集した採集物は印西市立中央公民館に展示してあります。

かつては、印旛沼周辺の沼に生息していたオニバスの紹介と、その復活に努力した人の取り組みについて掲載しました。

印旛沼がいつまでも、周辺15市町村住民の心をやすオアシスとなってほしいと思っています。私達一人一人の出来ることは微々たるものかもしれませんが、周辺住民70万人が行えば、印旛沼水質浄化の力強い行為となると思います。

読者の皆様の印旛沼に関わる様々な情報をお待ちしています。